

---

**いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。**

サークルO.L.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

### 【Nコード】

N6256Z

### 【作者名】

サークルO・L・

### 【あらすじ】

タイトルが本編で、内容は詩である。

君を好きになったのはいつなのか？（前書き）

タイトルが本題で、お送りするのは尖角です。

君を好きになったのはいつなのか？

悲しいかな、今日も俺は独りに耐えて生きている。

苦しいかな、友達も彼女もいないただ一人の孤独の生活は。

嬉しいかな、誰にも知らずに死ねるたった一つの喜びは。

俺は涙を流さない。

涙というものはとつくの昔に枯れてしまったのだから。

大好きなんて言葉にはとつくに飽きてしまったのだ。

伝えることができない、たった一人の俺にのしかかる重圧。

そこにあるのは空虚な生活。

悲しみも、怒りも、喜びも、楽しみも、愛も、何も、そこにはない。

俺が君から奪った幸せは、俺から君というものを奪った。

それは、昨日の話だったのか？

それとも、数年前の過去の話なのか？

それとも、俺が生まれるずっと前の話だったのか？

俺はたった一人の孤独な悪魔。

俺に涙なんてものはいらぬ。

その涙を映すものは無く、誰も拭ってなぐれないのだから。

自分で拭うことなんてできないよ。

「君を抱きたい」というために腕を切り落としたから。

君に近づくことなんてできないよ。

その欲望を鎮めるために足を切り落としたのだから。

君の鼓動を知ることはいかなる。

君にしたように、僕の胸にも穴をあけたのだから。

大好きだったんだ。 この世の中で最も。

だけど、俺は罪深き罪人。

君に愛の生き死にを教えることなどできないのだ。

所詮、俺は生けとし死せるもの。

何もそこにはありはしない。

ただ、そこにあるのはたった一人の虚しき存在。

俺はふと、記憶の奥底を探ってみる。

夢か現か、幻か？

涙の意味は何なのか？

苦しいとは何なのか？

君というものは何なのか？

嬉しさは所々で俺に話しかける。

「君は今、幸せですか？」

「いいや、別に？」 俺は答える。

寂しさは俺に話を振ろうとする。

「君は一人でもいいのかい？」

「ああ、寂しくはないよ、、、、」

悲しさは俺に言葉を投げかける。

「君は一体、何がしたい？」

「それは、ただただ死にたいだけだ・・・」

君は俺に言うのである。

「あなたは良い人」

じゃあ、なぜこんなことになるのか？

俺には意味が分からない。

愛が愛で無くなった時、それは一体何になると思う？

それはゾンビさ、寂しさゆえの一人の人生。

そうだ、俺は無意味に生きるだけ。

だけど、俺の記憶にそれは残っていない。

あたしは、気付いていたのかもしれない。

あなたが、別れを用意するより先に、あたし達の関係が終わりに近づいていたことに。

あなたの傍にいたのに、あなたは変わらないのに、あたしは変わってしまうもどかしさ。

寂しさがとめどなく溢れ出して、あたしは過去を振り返って見る。

いくらでも戻れるチャンスはあったはずなのに、あたしはそれに見向きもしないで突き進んだ。

だから、あたし達の関係は終わりを向けるんだ、、きっと。

ありがとう、ただそれだけは言わせてよ。

ちょっとしただけの恋人関係だったけど、楽しかったよ。



じゃあ、一体どこにあるのだろうか？

気持ちを静めてあなたの前に立ってみる。

すると、どうなると思う？

さっきまではトクトク流れていた私の血も、

いつの間にかドックンドックンに変わっているのである。

それはまるで映画の音響みたく大きな音で、

3Dのように私から突き出てきそうで。

あなたのことが好きなんだ。

この血よりも真っ赤な愛が、それを証明しようとしている。

だから、一歩だけでも君の下に近づいてみるよ。

それが、私にとっての精一杯の努力なんだから。

俺はそう思い、君の瞳を見つめてみる。

あなたに会いたい。

それ以外の気持ちも、必要なのだろうか？

私にはあなたしかない。

だから、私はあなたを求めるんだ。

あなたが、例え私を好きでなくても、

私が愛せるのならそれで構わない。

あなたの意見なんて聞いてないんだよ？

ああ、血だらけの人形たちよ！

私のために、お歌を唄いなさい。

ああ、血だらけのあなたたちよ！

私のために、骨と血肉になるのです。

ああ、素晴らしき子供たちよ！

私のために、死して無くなれ何もかも。

だが、そこに映りこむのは空っぽになった俺の姿。

口だけの想いならば、俺はそれなりに言えるであろう。

ただ、愛や恋だけでは語れないのが、君と僕との関係。

でも、俺は思うんだ。

約束を守れない俺、そして離れ離れになってしまった二人の距離。

愛しても、愛しても、なかなかその想いは届かない。

ならば、君を愛す理由なんて何もないんだ・・・。

だったら、俺は何をしても自由だろう？

君を振ったって、例え死んだって、、

逢いたくて、逢いたくても、叶わないならば、俺はこの愛しさを抱いて眠るよ。

俺は力を失っていたんだ。

君を知れば知るほど、俺は俺自身を見失っていく。

心は涙に溺れて、俺は記憶に埋もれていく。

叫びはない。そこにあるのは発狂という言葉だけ。

>こっちにおいでよ、キモチヨクナレルカラ。

>こっちにおいでよ、ダキシメテアゲルカラ。

君からそんな言葉が聞こえてくるようで、君の口元の動きを俺は直視できない。

>こっちにこいよ、クツテアゲヨウカ？

>こっちにこいよ、ヤイテシマオウカ？

俺はお返しに、その言葉を君に捧げる。

そう思った時には、すでに手遅れだった。

生と死の狭間、

過去と現在の記憶、

無意味と混沌の悲しみ、

俺は君を絶対に許さない。

例えば、人生が歪んだとしたって、

例えば、性格が捻じ曲がっていると言われたって、

俺は絶対に君を赦しはしない。

死ねばいいのに。

俺は、その言葉を君に捧ぐよ。

愛していた？

この俺様が？

君みたいな女を？

ビッチなんだよ？君は。

ヤレれば誰だって構わない君だよ？

俺が好きになる訳がないだろう？

屈辱だよ。

例え、君を一瞬でも愛したという事実があるのは。

最悪だよ。

君に指輪をあげてしまったことが  
。

君が好きだったけれど、想いすぎていた。

人生で少しだけ後悔したことがある。

それは君に別れを告げてしまったこと。

大好きだったけれど、なんだか気持ちはすれ違って、うまくいかない。

そんな日の繰り返しに俺は疲れてしまったから、君に別れを告げた。

それから、時々君のことを考えていた。

あの時・・・この時・・・そして今・・・

何をしてやればよかったのか？

それでも俺達の関係はダメだったのか？

苦しかった日々は免れたのか？乗り越えることができたのか？

俺は君と別れたことで何か手に入れることができたのか？

多分、手に入れたのは“後悔”

それだけだろう。

何事も、“やりすぎ”はよくない。

全てのことはうまくはいかない。

そんなことはわかっていたよ。

だけど、君とこのことの全部がダメだなんて思ってなんかいなかった。

俺は、考えたこともなかった。

君と出会って、喧嘩をして、それでいて苦しくって、ふと気が付けば別れていて・・・

そして、君は死んでしまった、いなくなってしまった・・・俺の前から・・・

何だ、人生ってそんなものなのか？

命ってそんなに簡単に失われるものなのか？

俺はわからないから、少しだけ神様に刃向ってみるよ。



それは、誰もが知っている“当たり前的事”。

歌を唄い、言葉を葬る。

そこにあるのは、人間の叫び。

我らが行う、悪魔の降臨儀式。

ここは正も誤も存在しない、偽りの世界。

本当なんてものは、ここにはありはしない。

君も俺も、そして全てが嘘偽りでできている。

さあ、血に染まるがいい。どこまでも真紅に。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の血を求めて蠢いているぞ？

さあ、啜れ。好きなだけ生き血を啜るがいい。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の魂を求めて扉を叩く。

だけど、俺はそんな当たり前に気付きもせず、俺はお前を愛し続けた。

俺はお前が憎い。

楽しかった人生を、つまらない人生に変えたお前が憎い。

お前に出逢うまでは、「あの子がかわいい」とか「あの子とやりたい」とか思えたのに、今はお前しか考えることができない。

憎くて、だけど愛してるから、、

お前を憎むことはできても、殺すことはできない。

せめて、出逢った人がお前じゃなかったのなら、俺は変わったのかな？

俺は違った人生を歩めていたのかな？

ありがとな、お前を憎んでいても、俺は幸せだったよ。

ありがとな、死んでも、お前だけは忘れないからな・・・

何もかもが手遅れ、何もかもが叶わない。

頭が飛ぶぐらいイカレた感じで、頭が飛ぶぐらいキモチヨク、

頭がとろける位の熱いキスで、頭の中が君だらけ。

砕け散る心の音は虚しくて、切なくて、

俺はそんな想いを君に向けて放っっていたんだ。

だけど、想いは届かない。

閉ざされた扉をどれだけ叩いたところで、

中にいる人は叩かれていることにすら気付かない。

そのことを知らない君は、俺に向かってどれだけひどい言葉を浴びさせただろうか？

多分、そんなことにすら気付いていない君は、

これから先も俺を傷つけ続けるのだろう？

そんな人生を望んだ覚えはないのに・・・。

俺達には、目の前の障壁なんて関係ない。

君が傍にいて付いて来てくれるなら、

乗り越えることだって、壊すことだってできる。

俺達に“不可能”なんて文字は無いんだよ。

昔、誰かが俺達に言ったよね？

「諦めなければ、夢は叶うもの」 だって 。

俺も、その通りだと思うよ。

だから、俺達は結ばれて、結婚することになったんだから。

今までありがとうございました、 俺の隣にいた恋人よ。

これからも宜しく願います、 俺の隣にいる君だけよ。

なのに、“君を失った”事だけは変わらない事実で。

人を人が好きになるのは当たり前のこと、

いつか人が人を嫌いになるのも当たり前のこと。

それは、別に何も悪いことじゃない。

ただ、自然というものがそのように成り立っているということなだけ。

ただ、それだけのことなんだ。

だから、君のことを俺が好きになったことだって、

君が俺のことを好きじゃなくなっただって、別に悪いことじゃないんだ。

誰も俺のことも、君のことも責めることはできないんだ。

ただ、それだけのことなんだ。

俺はそれから変わる努力を続けた。

「君と一緒にになりたい」と思っても、その想いは君には絶対に届かない。

君は俺をここに置いたまま死んでしまって、俺の隣にはもういない存在。

君の髪の毛の香りが残っている枕も、君の肌の温もりが残っている布団も、

君が死んでしまっただけからは、“遺品”としての意味しかなすことはない。

苦しくたって、もう涙を拭ってくれる人はいない。

寂しくたって、俺に愛を与えてくれる人はいない。

もつと傍にいたかったけど、どんな時も離したくなかったけど、

君が死んだことは、俺にはどうしようもできない事実。

だけど、俺だけは君を忘れないでここにいますから、

君が寂しくなって独りでいらなくなかった時は、俺の傍においでよ。

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

あけおめです！

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

心からの「ありがとう」、「心からの」「ごめんなさい」、「、、、

その二つを足したら、

君は一体何ができると思う？

それはね、

僕の大きな悲しみだよ。。

君は

絶対に受け取らないから、

僕という言葉なんて

絶対に受け取らないから、

二つを足すと

僕の大きな悲しみが生まれるんだ・・・。



君には絶対に、一生かかってもわからないだろう？

君はモテモテで、男になんて困らないから。

だけど、僕は君だけしか好きにはなれない。

だから、僕からは大きな悲しみが生まれるんだ・・・。

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

書き方が変ですみません^^

俺はどこも変えることができなかった。

女にとって《愛する人に愛され続けること》が、どれほど大切なことか、あなたは理解しているのだろうか？

あなたは、きっと理解していないでしょうね。

女の気持ちなど微塵も考えたことがないあなたは、私の気持ちも考えることができなかった。

だから、他の女を傷つけることもあるでしょう。

だけど、負けることなく進むあなたは、過去の女なんて思い出さずに今の女を愛すでしょう。

だけどね、覚えておいてほしい事があるの。

女は《愛する人に愛され続けることが一番の幸せ》だということを。

あなたはいつか気付くでしょう。

「自分がいけなかった」と。

「自分が不幸を呼ぶんだ」と。

だけど、気付いた時には時すでに遅し。

あなたは私を不幸にした。他の女も不幸にした。

そして、これからも他の女を不幸にし続ける。

あなたは疫病神。 私の昔の大事な彼氏。

いつだって、俺の努力は報われない。

涙なんかいららない。

涙を拭うハンカチだっていららない。

俺には何もいららない。

君だって、俺を不幸にさせるだけ。

だったら、君だっていららない。

誰も、何もいららない。

支えてくれるはずだった友達も、俺には何もしてくれない。

俺には支えてくれる人間がいないのだ。

だから、友達だっていららない。

信用できるものなんて、信用できる絆なんて何もないんだ。

全ては裏切りの中で生まれているもの。

俺だって、君だって、誰だって、嘘偽りで固められただけの存在。

だけど、俺の目からは、なんで涙は溢れるんだろうか？

神様は俺に手を差し伸べてくれない。

殺してやる

俺はそう君に告げた。

大好きだったけど、

俺の最後の言葉はそれだった。

悲しかったな、俺等の人生。

温かかったな、俺等の過ごした時間。

苦しかったな、お前の死ねなかった最後。

ぬるかったな、俺の殺し方は。

一回で殺せなかった。

愛情がまだそこにはあったから、

無意識のうちに手加減をしてしまった。

だから、君の身体をあまり傷つけたくなかったけど、

俺は何回も何度も君の身体を刺してしまうことになった。

許してくれ、俺のした過ちを。

俺は許するよ、君のした過ちを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6256z/>

---

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

2012年1月5日22時50分発行